

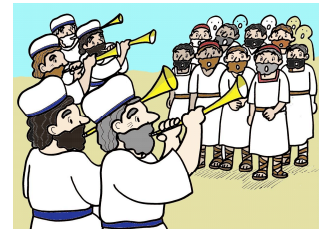
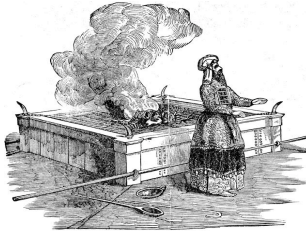


【先週のメッセージより】 第二歴代誌 29章1～30章

「神を礼拝すること／ヒゼキヤ王から学ぶ」

● 宮浄めと新たな心での礼拝を。

ダビデから数えて15代目にあたるヒゼキヤ王は、父アハズの時代に閉じられてしまった主の神殿の扉を開け、神の忌み嫌われた偶像礼拝の器具類を全部処分し、宮浄めを実行した。神への礼拝がすたれて



てしまっていたことが原因で神の怒りが下っていたことをヒゼキヤは認識していた。そこで彼は民と共に神の前に悔い改め、いけにえの血を流して贖いをなし、全焼のいけにえをささげた。浄められた民は、罪赦され、真心を持って喜びに溢れて主に礼拝をささげた。

● 聖霊の宮である私たちにおいても礼拝が行われなくなってしまう

新約の時代に生きる私たちも、神を第一とすることをやめ、いとも簡単に偶像礼拝に陥って聖霊を悲しませ、主を捨てて、与えられている御霊を消してしまう。礼拝に来ていながら既に聖霊の灯火は消えているなら、そう遠からじ、礼拝にも足が向かなくなる。神はしかし、真の信者を決して見捨てることはなさらず、宗教改革の機会を与えて下さるのである。今、悩んで葛藤の中にある人たちは、手をこまねいていないで、示されている偶像を捨て、悔い改めて神に立ち返ろう。

● ローマ1:21、12:1 に示されている礼拝の三つの要素：

人間は「神を崇め」「神に感謝」しないことで偶像礼拝に陥る。だからまずこの二つの礼拝を生活の中で実行しよう。三つ目はいけにえである。主イエスが十字架で私たちの罪の贖ってくださったので、神の前に出るために、私たちは生きた動物をもはや必要とはしない。では何を主にささげるのか？ それは自分自身である。私たちは「生きた供え物」として、礼拝の度ごとに、自分たちをささげるのである。ゆえに今日も、自ら浄め、神に受け入れられる供え物としよう。

【今週の暗唱聖句】 詩篇 95:1

さあ主に向かって、喜び歌おう。

われらの救いの岩に向かって、
喜び叫ぼう。

●主を礼拝するときの「感情／エモーション」について聖書はどんなことを教えているだろうか。

「声高らかにほめ歌を歌え。タンバリンを打ち鳴らせ。六弦の琴に合わせて、良い音の立琴をかき鳴らせ。」詩篇81:3、「全地

よ。主に喜び叫べ。大声で叫び、喜び歌い、ほめ歌を歌え。」詩篇98:4、「角笛を吹き鳴らして、神をほめたたえよ。十弦の琴と立琴をかなでて、神をほめたたえよ。」詩篇150:3、「彼らは大声で言った。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」」黙示録5:12、「彼らは、大声で叫んで言った。「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。」」黙示7:10

●ルカ15:10に「…ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」とあるが、神と天使たちは一人の人の救いがどれほど高価なものであるを知って最大限の喜びを表現する。しかし私たちはどうだろうか。普段の生活の中で、与えられた救いをどれほど心から感謝し、喜びに溢れて主を讃えているであろうか。

●実はあんまりピンと来ていないかも知れない。特に先進国に住み、裕福な生活をしている私たちにとって「魂の救い」も多くある恵みの一つくらいに思ってしまったのだろうか、賛美の時間は礼拝のおまけくらいに思ったり、賛美にも力が入らない。だからこそ、聖書は私たちに精一杯、力の限り賛美するように命じているのではないだろうか。上記の詩篇は皆、命令形であることに注意してほしい。命令であるなら、悲しんでいようが、礼拝したくない時であろうが、それでも、精一杯礼拝することが求められているのである。

●実はここに秘密がある。人間は心と身体がつながっている。あなたは本当に物理的にひれ伏して祈ったことがあるだろうか。心が身体に追従して謙遜になっていくのを感じたであろう。手を上げて、大声で賛美したらどうなるだろうか。心は身体に追従して本当の神の偉大さを理解し、喜びに満たされて行かないだろうか。精一杯、力の限り、大声で、私たちの神に向かって賛美するように心掛けて行こう。タンバリン、角笛、立琴、六弦、十弦の琴を使うようにも命じられている。私たちの礼拝が更に豊かなものになるように求めて行こう！■

